

近くの島々からの二年生を防空壕に寝かせました。日が落ちあちこちの火の手が見え始めた頃、学校のプールの南にあった創設期の帝人の赤レンガの建物から火が出ましたが、三菱造船に動員されていた四年生が中心に、消火に当たり学校のある南千田町の一角は消失から免れて、戦前の家が、今も数軒残っていて昔の面影があります。

その夜は広島を南西から北東に向かつて火の海と成りました。全壊、半壊の木造家屋は燃えるにも好都合な状態で、一晩で、皆さんがパネルなどでご承知の広島に成りました。

翌朝明るくなって防空壕の学友を因島に帰らそうと起こしに参りますと、誰もが足が立ちませんと言います。舎監と相談して私が因島に帰り、

船を宇品港に回して救出しかねる事になり、二百メートルほど北にあった御幸橋駐在所に罹災証明を頂きに行きました。

昨日とは一変して、残っているのは遙か彼方の百貨店と日本銀行等のビルと風呂場のタイルと流台のタイルと大木の黒焦げた幹が一メートル程が残っているだけ、一面の焼け野原で、まだ一人の人影も無い。舎監の奥さんはそんな状態では怪我をしている貴方は無理だと反対されたが、助かる方法は、とにかく広島を脱出するしかない想いで、許可を得て、学生服を火傷の上に被って前に数冊の教科書、後ろに銀舍利のニギリを背負って寄宿舎を後に京橋川添いに広島駅に向いました。街を歩く人は見当たりませんが、足許には、全裸の人々が累々とうちならんでいられ

る。火脹れでパンパンに張って針を差すとパチンと弾けるのではないか、まだうごめいている人が多い。状況からみて昨夜の火事で、瓦礫の下敷きで逃げられず、被っていた木が燃えてやっと思いつき出し、この土手で、あ助かったと安心して倒れた人達だったのでしよう。兵隊さん助けての声のする方を見ると比治山の麓。京橋川のお陰で旧市内の、大火から唯一助かった所らしく瓦礫の下からの声でした。一晩どんな想いで過ごしたのでしょうか。やっと思いついた兵隊も、目的が違うのか通り過ぎて行きます。そういえば昨日まで学校の講堂にいた百名ほどの兵隊も、私が寄宿舎に帰った時には、中国山脈の麓の三次方面に移動したとかで一人もいませんでした。

京橋に近づいた頃に、あちこちに